

CS ルイスにおける悪の問題

— 護教論と小説 —

本 多 峰 子

CS ルイスは20世紀英国を代表するキリスト教護教家として多数の著書を著し、BBC放送等でも信仰の論理や悪の問題について人々に語りかけた。また作家として、ファンタジー、SF、小説等に自分のキリスト教信仰と伝統的教義を反映させている。本論では、彼が護教論で悪の問題をどのように論じているか、それを創作にどのように反映させているか、彼の論理的コンテクストと、想像力の世界での悪の問題の扱い方とに、どのような一貫性と相違があるかを考察したい。その際、前年度の二松学舎大学『国際政経論集』(vol. 9)に掲載した「悪の問題にむかう——神学と文学における考察に関する試論」を踏まえて、議論を進めてゆきたい。

前論で悪の問題を論じる際にまず区別されたのは、＜自然悪＞(natural evil)と＜道德悪／人間悪＞(moral evil/human evil)、つまり、自然の災害や生老病死などに伴う苦しみと、人間の罪や過誤に帰せられるいわゆる悪や苦しみであった。

ルイスは自然悪については、あまり論じていないが、この世のはかなさや自然界の弱肉強食の生態系が次のように無神論の論拠となることは意識している。——広大な宇宙は、ほとんどが何もない冷たい空間であり、その中でも惑星をもった太陽はさらに少なく、そうした例外的な銀河系でも、生命をもつ惑星はおそらくこの地球だけであろう。しかも、地球が生まれてから生命が現れるまでの何百万年もの空白期間と、生命が消滅してからおそらくまた続く長い歴史の中で考えれば、地上に生命が存在するの

は、ほんのわずかの一時期と言えよう。そして、生命体が存在するわずかな間も、その生態系は弱肉強食で成り立ち、生物は互いに殺しあっている。高度な動物には意識があり、危害を加えられたり殺されたりする時には痛みを感じる。さらに人間の場合には、理性があり、将来の苦痛を予期して心理的苦痛まで味わっている。そして、永世を望みながら死を予期して苦しむのである。人間の歴史は犯罪や戦争や病気の歴史であり、時に、文明が現れてそうした苦しみ of いくつかが多少軽減されることはあっても、結局、いかなる文明もやがて消え去る。しかも、各々の文明にはそれぞれ独自の欠点があり、文明によって改善された部分と改悪された部分を考えれば総体的には必ずしも文明が幸福をもたらすとは言い難い。そして、究極的には宇宙の終わりと共に何もかも無に帰してしまい、エントロピーの法則で低温状態の均一な空間に戻ってしまうであろう。そうしたことを考えれば、宇宙の背後に神のようなものがあると考え、自体が誤りか、いたとしても善悪に関心がない神か悪なる神だろうと考えるほうがむしろ自然に思われる。(Pain, pp. 1-3)——このように善なる創造主の存在を否定する無神論を想定して、ルイスは、それに抗弁をしている。彼はまず、宇宙の大きさやはかなさは、すでにプトレマイオス¹⁾にも書かれていることであり、中世の頃にはすでに天文学者に十分認識されていたと指摘する。中世の人々が科学的に全くの無知だったというのは、現代人の誤解である。中世において、地球を中心に見たのは天文学ではなく、神学であった。(Studies, p. 46) それゆ

え、近代になって起こった変化は、知識の増加というよりもむしろ、その知識がキリスト教の神を信じることに對する反論の論拠と見なされるようになったことだと言える。しかし、地球が宇宙の中でほんの微々たるものに過ぎないということは、実は、信仰の是非とは無関係である。

自然界のあり方に憤り、このような残酷な宇宙を作ったのは、悪しき霊ではないかと考えることには、ルイスは、決定的な論理矛盾を見ている。もし、われわれを作った創造主が悪であれば、われわれの善悪の基準も究極的にはその創造主から来ていることになる。つまり、われわれが創造主を悪と呼ぶその基準も、その創造主から来ていることになるのであるが、われわれは創造主を残酷だとか悪だとか言って責める時、われわれの善悪の基準だけは妥当なものとして信じていることになるからである。つまりこの論理で神を否む者は、世界が完全には無意味ではなく、少なくとも妥当な善悪の基準を持って作られていることだけは信じているのである。創造主を悪と責めながら、結局は、完全には悪とは考えていないことになる。

ルイスは、こうして、この自然界の究極的な不毛さは、本質的な悪の問題ではないと考えているようである。そこで次節より、道德悪にしばって彼の考えを見てゆくことにする。

悪の本質

プライド（傲慢の罪）

アウグスティヌスは悪の本質は善の欠如、あるいは歪曲であると考え、²⁾ 人間の悪の根源は、人間が神に与えられた自由意志を濫用して神から離反したことにありと見た。³⁾ そして、その罪は神から自分の方に向いた傲慢の罪である。⁴⁾ 彼は、人間に先立ってサタンがまず、根源的な罪を犯したと考えている。

アウグスティヌスはサタンの罪を「最高度に存在するかたから背離して最高度に存在するのではない自己自身へ向かって転じたということ

にある……この欠陥が傲慢と呼ばれるのではないならなんと呼ばれるべきであろうか。すなわち「あらゆる罪のもとは傲慢である」⁵⁾ と言っている。ルイスも、アウグスティヌスに倣って悪の根源は傲慢の罪であると考え、悪の性質を、善の歪曲、欠如、善からの疎外と見ている。

最大の罪は、アウグスティヌスによって、傲慢の罪と言われている。これは、被造物が（本質的に他に依存した存在であり、存在原理がそれ自体ではなく他の方のうちにあるにもかかわらず）ひとりで立とうとしたこと、自分の存在を自分のためのものにしようとしたことにある。……被造物は、神を神として、自分を自分として意識した瞬間に、神中心に生きるか自分中心に生きるかの恐ろしい選択をすることになる。そしてこの罪は、幼い子供でも無学な農夫でも、学識のある人々でも、隠者でも、社会生活をしている者でも、毎日のように犯している罪なのだ。（*Pain*, p. 63）

ここで重要なことは、自我に執着する自己中心性をルイスが、キリスト教で七つの大罪と言われる罪の中でも最も重いとされる「プライド」つまり「傲慢」と同一視していることである。また、ルイスが、人間の本質的な罪（原罪と言っても良いだろう）を一回きりの行為としてではなく、人々が日々繰り返すひとつの生き方、あるいは状態として見ていることも重要である。

彼はさらに、プライドを自己欺瞞と同一視し、その特色をこう述べる。

プライド、つまり自己欺瞞であるが……人を傲慢にするのは他との比較である。プライドとは、他よりも上にいるという喜びだからだ。……神において、人はあらゆる点で自分よりもすぐれた存在と向うことになる。神をそのようなものとして知るまでは——そして、その結果、自分を神と比べれば無に等しい存在と知るまでは、少しも神を知っていることにはならない。傲慢な人間は常に物や人を見下している。そして、もちろん、人は下を見ている限り、自分よりも上にあるものは見えないものだ。（*Mere Christianity*, pp. 106-109）

こうした見方は、キリスト教の考える神の存

在を前提とし、神の全能と善性を受け入れた立場で書かれていることは、明らかである。そこで、ルイスの護教論に戻り、彼がどのように、神の全能、善性と、この世に悪が存在するという事実との緊張——つまり、キリスト教以前に、既にエピキュラスが、神の全能と善性について悪の存在から疑問を投げかけ、エピキュラスの弟子、ルクレティウスが簡潔に、「世界は絶対に神の力によって作られたのではない。世界にはあまりにもたくさん悪がありすぎる」⁶⁾ と言っているこの問題に答えているかを考察する。

悪の存在の論理的問題点

悪の存在を、ルイスは『痛みの問題』でとり上げ、まずこのように問題をまとめている。

もしも神が善であれば、自分が造ったもの達を完全に幸福にしたいと望むであろうし、また、神が全能であるなら、自分が望んだようにできるであろう。しかし被造物達は幸福ではない。ゆえに、神は善性か、力か、その両方ともを欠くのである。(Pain, p. 14)

『痛みの問題』では、ルイスはまず、アウグスティヌスの自由意志論を踏襲して答えを出している。アウグスティヌスは、神は人間に自由意志を与えたが、それは人間が自らの意志で神に従うようになる為であると考えた。自由意志による従順の方が、強制された従順さよりも良いからである。しかし、神に従う自由は、神に背く自由でもある。そして、人間はこの自由を濫用して神に背いた。神ではなく、自分自身を主人とし、独り立ちしたいとの望みから。これが人間の原罪であり、ここから悪が生まれたのである。⁷⁾ ルイスは、神は全能であるが、神の全能もこの墮罪を防ぐことはできなかったと言う。なぜなら、自由意志を与えておきながら墮罪を犯させないように人間を縛るのは、自由を与え同時に自由を与えないという論理的矛盾だからである。神の全能とは、論理的に可能なことをすべて行ない得る能力であり、矛盾したナンセンスを行なうような力ではないのである。

(Pain, p. 16)

それゆえ、自由意志を与えられた被造物が悪を行ったとしても、それは、神の善性と矛盾することではない。

神の善と、われわれの考える善は異なりうるか？

神の善性について、ルイスはもうひとつ、問いを出している。つまり、神の善悪はわれわれの考える善悪と同じだろうか、という問いである。

もし神がわれわれよりも賢いならば、神の判断はわれわれの判断と多くの点で異なるに違いない。善悪の判断も異なるに違いないのである。われわれには善に見えるものも、神の目から見れば善ではないかもしれないし、われわれには悪に思えるものも、悪ではないかもしれない。(Pain, p. 25)

この問いに、ルイスは断じて＜否＞で答えている。彼はまず人間が善悪の基準をもっており、それを客観的なものとして扱っていることに読者の注意を促す。人は誰かの行為を責める時、相手が悪いと言う。そして、そう言う時、相手も自分と同じ善悪の基準をもっていることを前提しているものである。善悪の概念はもともとひとつで、万人に普遍的なものと前提しているのである。たとえ、相手と自分の道德基準が異なっており自分の道德基準の方が優れていると考えているとしても、実はその場合でも、無意識に、善悪の共通した基準を想定しているのである。

ある道德体系の方がもうひとつの道德体系よりも優れているという人は、実は……両者を何か「真の道德」というものに照らして比べている。ということは、人の思惟とは無関係に、真の正しさというようなものがあって、ある人々の考えは他の人よりもその、真の「正しさ」に近いことを認めているのである。(Mere Christianity, p. 23.)

時として、革新的な道德理論を自負する者が

現れても、実際は100%他と異なる新しい道徳などはない。いかなる道徳理論も既存の善悪の概念を持った人々に受け入れられて初めて真と認められるからである。

新しい道徳的判断というものは、(前になされた判断を覆すことはあるとしても)、最初は決して前にあった判断の逆転として考えられはしない。むしろ「現れるべくして現れた主人のように」心に浮かんでくるのである。(Pain, p. 26)

ルイスは、神の善とわれわれの考える善との違いを、完全な善と不完全な善との違いとして、次のように考えている。

神の「善」は、われわれの善とは異なるが、全く異なるわけではない。神の善はわれわれの善と、黒が白と異なるように異なるのではなく、完全な円が、子供が初めて車輪を描こうとした時の輪と異なるように異なるだけである。しかし、子供は上手に描けるようになった時、最初から描きたかったのはそのような円だったのだと悟るだろう。

この教義は、聖書に前提されている。キリストは人間に改悛を呼びかけた——もしも神の善悪の基準が、人々がすでに知っていて従えないでいる基準と全く異なるのであれば、そのような呼びかけは意味をなさないのである。(Pain, p. 27)

こうして彼は道徳の与え手が、キリスト教の説くような、悔い改めを要求し許しを与える神であると考えているのである。

もし世界が絶対的な善によって治められているのであれば、われわれの努力は結局望みがない。しかし、世界が絶対的な善によって治められているのならば、われわれは毎日のようにその善なる方の敵となっているようなものであり、明日は少しは良くなるという見込みもなく、やはり望みがない。どちらにしろうまくいかないのだ。それゆえ、神は唯一の慰めであり、また、この上なく恐ろしい方でもある。(Mere Christianity, p. 37)

ここで彼は、断りなしに「善」を神と言い換えて、最高善を自明の理として神と同一視する西洋の伝統をそのまま踏襲している。しかも、

世界に善なる統治者を見る上記の理論は、われわれの道徳的な努力は決して無意味ではない、という信念を含み、ルイスの理論は、世界のロゴスを公理的に前提する西欧の伝統に根ざしていることがわかる。

神の善性と全能

神はこの世をより良い世界に作れただろうがそうしなかった、それゆえ、神は善性を欠くのではないか、という問いに対して、ルイスは、そのように考える人の言う「より良い世界」という概念が、そもそも狭い視野に根ざすのではないかと指摘する。(これは、前論で取り上げた、ヨブへの答えとも相通じる。)

神は「～出来たはずなのに」という考えは、神の自由をあまりに人間中心的に解釈しすぎている。……神の自由とは、神の行為の作用因となるものは神自身になく、また、いかなる外的障害も神の行為を妨げるものはないということである——つまり、神の行為はすべて神自身の善から生まれ、神の全能のうちに花開くのである。(Pain, p. 23)

また、ルイスは、神の命令の意味無意味を巡って、ソクラテスが(あるいはプラトンが)『ユーフィフロ』(Euphyphro)で取り上げた問題、すなわち、善は神の意思であるから善なのか、それともそれが善であるから神が望むのか、という問題も考えている。ソクラテスの問いは、「正義(the right)のあるところには聖性(holiness)もまたあるのか、それとも、聖性の在るところには正義もまたあるというのだろうか」⁸⁾というものであった。ソクラテスは、聖性は正義の一部であるから、聖性のあるところには正義はあるが、正義のあるところに必ずしも聖性があるわけではないと結論した。⁹⁾ それに対し、ルイスは、神の意思は、神の意思であるからという理由だけでも善であるが、それと同時に、善は善であるから、神の意思となるのだと言っている。つまり、聖性は善であり、その逆もまた真ということである。プラトンの

あげた二つの命題は、二者択一ではなく、一体を成すものなのである。それをルイスは、『痛みの問題』で次のように述べている。

われわれが命じられることの内容は、必ず、本質的に善である。(有り得ないことながら、もしも) 神が命じなかったとしても、せねばならないようなことである。しかし、命令の内容に加えて、神に従うということ自体が、本質的に善なのである。(Pain, pp. 88-89)

世界のロゴスに対する彼の信念は非常に強いものであり、彼は道德律があたかも神からさえ自立した、世界に内在する法であるかのようにさえ考えている。そして、『人間廢絶』において、道德律について次のように述べているのである。

それは、すべての属性を超えた真理であり、創造主御自身より前からあった深淵なのです。自然の摂理であり、正しい道なのです。……客観的価値の教義であり、宇宙やわれわれの性質についてある態度をとることは真に正しく、ある態度をとることは真に誤っているという信念なのです。(Abolition, pp. 28-29)

しかしながら、彼は、神と道德律が両方別個に自立していると考えているわけでもない。西洋のギリシア＝ユダヤ＝キリスト教的伝統においては、善と唯一絶対神とは公理的に同一視される。そして、ルイスもその伝統を受けて次のように語っている。

善は創造されたわけではありません。善は他のものではありません。……善は、プラトンが言うように、存在の反対側にあるのです。……しかし、われわれは最も賢い異教徒たちよりも恵まれているので、存在を超えたところにあるもの、偶発性の余地のまったくないものが単なる法則ではないことを知っています。……神は単に善いだけではなく、善そのものであります。善は単に神的なのではなく、神なのです。(“The Poison of Subjectivism,” *Christian Reflections*, p. 80)

善悪二元論

善悪二元論ではこの世の悪は、善と悪の両方ともが、この世で対等の力をもっている必然であろうと考える。この考え方をルイスは以下のように否定している。まず第一に、両者が共に究極的なもの (the Ultimate) として相並んで存在することは不可能である。「善も悪も互いを説明できない。オールマツダもアーリマンも究極的なものであるとは言えない。そのどちらにもまして究極的なのは、両者が共に存在するという説明のつかない事実である」。(“Evil and God,” *God*, p. 22) 二元論者の考えるような善と悪とは、実は、各々絶対的な善に対するふたつのあり方なのである。

また第二には、人があるものを善と誉め、あるものを悪と責める事実が、善の優位を示すと彼は考える。善はそれ自体好ましいが、悪はそれ自体好ましくないものということになるからである。(“Evil and God,” *God*, pp. 22-23; *Mere Christianity*, pp. 44-45)

第三にさらに、西洋ではアウグスティヌス以来の伝統となった、「悪は善の欠如、あるいは善の歪曲にすぎない」という考えがある。善いものはそれ自体の価値によって追求されるが、悪、たとえば残酷さとか、貪欲さなどは、楽しみ、富、などの追求が過った方法でなされた時、あるいは過度になった時に生まれるのであって、楽しみや富自体は善である。悪は善の歪曲した追求から生まれるのである。あるいは、善が欠如することが、悪なのである。¹⁰⁾

第四に悪は悪行を働くためには、まず存在し、知性や意志をもたねばならない。しかし、存在や知性や意志はそれ自体善である。悪は善に依存しなければ悪も働くことができない寄生的存在にすぎない。(Mere Christianity, p. 46) こうルイスは考える。ちなみに存在を自明の理として善と見るのは、聖アンセルムス (1033-1109) の本体論でおそらく最もはっきりと示されたキリスト教あるいは西洋哲学の伝統である。アンセルムスのこの有名な護教論は、神をまず「そ

れ以上偉大なものが想像できないところの存在」と定義し、思惟のなかに存在するだけよりは、実際に存在するほうが偉大であるという理由で、神は実際に存在すると論じるものであった。¹¹⁾

痛みの問題

たとえ自由意志論を取ったとしても、全知¹²⁾全能の神を信じる者から見れば、世界に悪が存在する究極の責任は、やはり、神にあると言えよう。自由意志を与えたことによって、悪を可能にしたのは、結局は神だからである。前論で見たように、自由意志論に対する反論は主に次のようなものである。

- i) 自由意思で善のみ行なう者もありうるはずだし、全能の神ならばそのような者のみを作れたはずである。¹³⁾
- ii) 悪が全くない無垢の状態に作られたものが悪を行うということは、矛盾している。¹⁴⁾
- iii) 自由はそれほど与えられていない。人間はそれほど自由ではない。¹⁵⁾
- iv) 生態系全体での生物の進化を見れば人間の進化も低次から高次へと完成に近づくと見るほうが自然であり、人間がまず完全な形で創られ、墮罪を犯し、それを贖うために神の御子が受肉して十字架にかかったという教義自体、信じられない。¹⁶⁾

このことについて、ルイスの答弁は以下のように見出されるであろう。

- i) われわれは、自由意志の濫用を神が常に正す世界を想像することも出来ようが、そのような世界は、誤った行為が不可能な世界であり、実際は自由意志とは名ばかりの世界になってしまう。(Pain, p. 21)
- ii) 自由意志をもつということには、誤った選択をする可能性も必然的に伴う。

また、ルイスは、楽園の人間が墮罪を犯すに

先立って他の理性的生物（サタン）が墮罪を犯しており、それが人間を誘惑したとも考えられると言っている。その説をとれば、人間が現れる以前に自然界に弱肉強食の殺し合いがあったことも、そのサタンの罪による汚染として説明がつく。(Pain, pp. 122-123)

ルイスは人間の墮罪を自由意志の濫用による神からの離反と見るが、その際にも「誰か、あるいは何かが人間たちに、「あなた方も神のようになれる」と囁いた……そして、彼らは自分たちでひとり立ちしたいと望み、自分たちで楽しみや安泰を得るように計画し、自分たち自身で未来をつくってゆきたいと考えるようになった。＜自分たちのもの＞と呼ぶものを欲しがるようになったのである」(Pain, pp. 67-68) と、人間に先立つ墮天使の存在を考えている。

- iii) 自意識があるということは、自分と他者、自分と神とを別個のものとして意識することである。そして自由意志によって、われわれは常に、自分を選ぶか神を選ぶかの選択肢が与えられている。(Pain, 17)
- iv) 人間が道徳的に無垢で完全な善なる存在として作られ、神に対する不服従の罪で落ちたと考えるのは進化論に反すると考え、伝統的な教義は「科学によって誤りと証明された」と考える人もあろうが、人間が生物学的に下等な生物から進化したことは、必ずしも道徳的に進化したことはない。動物には道徳はないし、原始時代よりも今の方が道徳的に進んでいるとは断言できない。われわれは、考古学で発見されたものによって原始時代を知るが、現存する原始時代の器具が現在のものよりも劣るとしても、それは原始人が現代のものに比べてあらゆる点で劣るということにはならない。「最悪の陶器しか作れないものが、最高の詩を作ることもありうる」のであるから。(Pain, pp. 60-61)

痛みは神のメガフォンである

神がこの世に悪の存在を許すということに関して、ルイスは、自由意志論による論理的必然性に加え、より積極的な意味を見出している。われわれの苦しみを、われわれの罪に対する神の罰と見るという見方は、ユダヤ＝キリスト教の伝統の中でも旧約時代から見られた解釈であり、ルイスも、この考えは否定していない。しかし、それに加えて、神は人間をより良くするために痛みを与えると考えるのである。人によっては、もしも神が慈悲深く全能であるというのならば、神は人間に罰を与えたり、苦しめたりしないでただ、赦すことが出来るはずではないかという問いを発するであろう。そのような問いを予想して、ルイスは次のように言っている。

人は真に罪を感じれば——われわれの人生にそうした瞬間はめったに訪れないものだが——そうした冒瀆的な問いは消え去ってしまう。……この罪を治まらぬ怒りの目で見ないような神は善なる方ではない、と感じるだろう。そのような神を、われわれは、望みさえできない。……われわれは、自分たちが悪いと口先だけで言っているときには、神の<怒り>などとは野蛮な教義だと感じるだろう。しかし、自分たちの悪さを実感すればすぐに、神の怒りは神の善からの当然の帰結に見えてくる。(Pain, p. 46)

ルイスにとって、神は愛の神であるのみならず、どこまでも正義の神であった。そして、罪に対しては正当な贖いをする責任を取れることが、人間としての権利と不可分であると考えていた。たとえば彼は、現代の裁判で、犯罪者に対していわゆる「人道的な処置」を取ることにしても、否定的な態度を示している。英国で犯罪者を処刑する代わりに、精神疾患として治療することの是非が論議された時のことであるが、正当な罰を与える代わりに治療（無期限になるかもしれない）を課すことは、かえってその犯罪者の人格軽視につながると、彼は論じている。

私の論点は、この教義は寛大に見えるけれども、本当は、私たちは誰でも法を破ればその瞬間から人間としての諸権利を奪われることを意味するということです。人道的理論は罰から、「応報」という概念を取り除きます。けれども、罰と正義とを結びつけるのは、この「応報」という概念だけなのです。一つの判決が正義か正義でないかは、それが当然の報いであるかないかによります。(Dock, p. 288)

ただし、ルイスの場合、神の罰というのは、日本人がよく「罰があたった」とか、「当然の報いだ」というような言葉で表す、昔話によく出てくるような、たとえば花咲爺さんのポチを殺した悪いお爺さんや雀のお宿の欲張りなおばあさんがうけた罰とは大きく異なる性質のものと考えてよい。おとぎ話や神話で究極的な罰と言えば、「地獄に落とされる」ということになりそうだが、ルイスの場合、地獄は神が人間を落とすところではない。『痛みの問題』で、ルイスは、イエスが地獄を三つの言い方で表していると指摘している。第一にそれは、「罰を与える場所」であり、第二に「破壊の場」、第三には「外の闇への追放の場」である。そこでルイスは、「破壊の場」としての地獄を説明するのに、薪を燃す例を挙げ、地獄の魂は、ちょうど薪を燃して残った灰のように、もはや「魂」ではなく、燃されて残った残骸のようなもの、つまり、「魂であったもの」にすぎないと言う。(Pain, pp. 112-113) しかし、ルイスのキリスト教の考えでは、過去の罪は十字架のイエスを信じて改悛し、神に戻ってやり直そうとすることで赦される。それ故、地獄に行く者は、自分の犯した罪の罰として行くのではなく、罪を悔いることを拒否し、救いを拒否するというそのことで地獄に行くのである。つまり、地獄落ちは、神が罪に対して与える罰ではなく、罪に対する救いの拒否という形で、人間自身が選択したことなのである。結局、「外の闇への追放の場」というのも、ルイスにおいては、生涯をかけて人間が重ねてきた選択がその人間の本質を決定的に定め、自分で行った選択が撤回できな

くなった地点で、その本人が選んだ闇（神の光の届かない、神から自己疎外した状態）しかなかった状態と考えられる。

ルイスは、「痛みは耳を閉ざした世界を起こそうとする神のメガフォンである」と言う。この意味を考える前に、彼が、「愛はその対象に痛みを与えることもある。ただし、それは、対象が完全に愛に値するようになるために変わらなければならない場合である」(Pain, p. 43)と述べ、神の人間に対する愛を、次のような4つの愛の形に喩えて考えていることを見ておきたい。

1. 芸術家が、その作品に対して持つ愛情（創造主と被造物）。
2. 人間が、動物に対してもつ愛情（自分よりも劣ったものに対する愛）。たとえば、人間は飼い犬を訓練してより良いものにしようとする。それを犬は望まないかもしれないが、野良犬よりも清潔に保たれ、よく調教された犬の方が良いことを、人間の方は分かっている。
3. 父親の、息子に対する愛（ただし、父親の権威が強かった頃の）。父親は、年配者としての知恵をもって息子を見、自分の権威を用いて、息子が正しい人間になるように鍛えようとするであろう。
4. 女性に対する男性の愛。

この深く厳しい愛を、ルイスはこう語っている。

神は私たちのうちに住ませた霊を、嫉妬深く愛しておられる」(ヤコブの手紙、4:5。欽定訳聖書は誤訳)と言う。愛は、すべての欠点を許し、その欠点にもかかわらず愛し続けることが出来る。しかし、愛は、その欠点を取り除きたいと望むことをやめることはない。愛は、愛するものの欠点に関しては、憎しみよりも敏感である。……あらゆる力のうちで、愛は最も多くを赦すが、大目に見ることは最も少ない。神はほんのわずかなことにも喜ばれるが、すべてを要求される方でもある。(Pain, p. 34)

今日のわれわれは、愛と甘やかしの親切や優しさを混同して、厳しさを残酷と感ずる癖がついている。また、精神分析での抑圧のシステムに関する学説から恥の意識を危険で有害なものとする癖がついている。そのために、このような厳しい愛や、それを受ける人間が自分を恥じる自然な気持ちを抱くことが愛の正しいあり方であることを忘れていたのであると、ルイスは言う。(Pain, p. 43)そして、神はこのように、善であっても、というよりはむしろ善であるからこそ、たとえわれわれに痛みを与えることになったとしても、われわれをより良くしたいと考えるにちがいないと、ルイスは演繹する。

そして、このような愛をもってわれわれに対する神であれば、われわれの悪い部分は、われわれにとって辛い手術を施すことになっても切り取りたいと神は考えるであろう。

その際、われわれのうちで悪の根源である自己中心性はすでにわれわれの性^{さが}になっているので、切り捨てるのが辛いのは当然である。しかし、それを切り取る手術の痛みを与える前に、まず、神は、メガフォンの役割を果たす痛みによってわれわれに、自分たちの悪を認識させるのであると、ルイスは考える。痛みはわれわれに、何か悪い箇所があると気づかせ、どこがいけないか反省させるからである。

われわれは自分の罪や愚かさには構わず、満足してられる。……しかし、痛みはどうしても気にせずにはいられない。神はわれわれの楽しみにおいてはわれわれにささやきかけている。われわれの良心においては語りかけている。しかし痛みにおいては叫んでいる。痛みは耳を閉ざした世の中を起こそうとする神のメガフォンである。(Pain, p. 81)

神は、われわれの人生から快適さを奪うことによって、われわれを神のほうに向かわせ、神に頼らせ、われわれが自分たちの人生を神に差し出すことが出来るようにしたのだと、彼は言う。

私は、これを、神の謙遜と言う。船が沈みかけて降参するのは情けないことだ。最後の手段として神に助けを求め、自分を固持している値打ちがなくなって初めて自分を差し出すのは、情けないことだからだ。もしも神が傲慢な方であられたら、このような条件では受け入れてくださらないだろう。けれども、神は傲慢ではあられない。勝利するために膝を折ってくださるのだ。……被造物が抱えている自己充足の幻想は、被造物自身のために打ち碎かれなくてはならない。そして、この世の恐れや困難によって、また永遠の業火を恐れさせることによって、神は、「御自身の栄光が減ることも省みずに」、われわれの幻想を打ち碎かれるのである。(Pain, p. 85)

ルイスは、罪の概念を取り戻すことがキリスト教の救いにはまず必要だと主張する。「キリストは、人間が悪いということを前提としていた。われわれは、この前提を心から真実と実感しなければ、彼が救い主として来てくれた世界に生きていても、彼の言葉が向けられた聴衆のひとりにはなれない」(Pain, p. 45) と、彼は言うのである。

昔のキリスト教伝道家は、聞き手がユダヤ人であれ、<神を畏れる者たち>であれ、異教徒であれ、罪の意識をもっていることを前提にできた。(罪悪感が異教徒にも共通していたことは、エビキュラスの快楽主義や神秘宗教も、方法こそ違うが、罪の意識を鎮めると主張している事実からも分かる。) だから、キリスト教の使信は、当時は間違いなく、<福音>——良き音ずれ——だったのだ。自分たちが病んでいることを知っている人々への、癒しの約束だったのだ。けれども私たちは、聞き手にまず不愉快な診断結果を信じさせなければ、癒しの知らせを喜んでもらうことも期待できない。

昔の人は、神に(そして、異教の神々にさえも)、被告人が裁判官に向かうように向かった。現代人にとっては、その役割が逆転している。人間が裁判官で、神は被告席にいるのだ。それは、かなり親切な裁判官かも知れない。神が、戦争や貧困や病を許す神であることについて、もっともな抗弁があるというのならば、それも、喜んで聞いてやるだろう。裁判が神の無罪放免で終わる可能性さえある。けれども、重要な点は、人間が判事席におり、神が被告だということ

とだ。(Dock, p. 244)

小説における、ルイスの、 悪の問題の提示

神からの離反

ルイスにとって究極の悪は、被造物が自分の意志で神から離反することであり、これは、アウグスティヌスの原罪の考えに沿ったものである。これは、彼の初期の創作『天国と地獄の離婚』に最も明らかに示されている。ルイスは、天国の存在を信じ、人間はこの世の選択の積み重ねで、死後天国に行くか地獄にゆくかを自己決定していると考えていた。そして、地獄堕ちも選択の問題として、様々なケースによって提示する。

われわれが生きている世界では……すべての道が何マイルかごとにふたつに分かれ、それがまた二股に別れており、別れ道ごとに選択を迫られる。……ひとつにまとまってゆくのではなく、ますます別れていっており、被造物たちは完成に近くなるにつれ、ますます互いに離れていく。(Divorce, p. 6)

誤った道を進めば進むほど、引き返すのは難しくなる。悪はどこまで推し進めても決して善には変わらない。誤った選択、過った行為、悪い習慣などは、改めて、正しい道に戻り、やり直さなければならないのである。

最後には二種類の人間しか残らない。神に「御心をなさせたまえ」と言う人たちと、終いに神に、「おまえの思い通りにしなさい」と言われる人たちである。地獄にいる人は、地獄を選んでいる人だ。自らそのように選択しなければ、地獄はありえない。喜びを真剣に求め続けた魂は、必ずそれを手に入れるであろう。求める者達は見いだす。門をたたくものには門は開かれるのである。(Divorce, pp. 72-73)

このようにルイスは、人間が最終的には天か地獄かで永生を見出すと考えている。そして、そう考えれば、その永生に対し、この世は単なる——しかし決定的な重大さを持つ選択の——道程と見られることになる。

この世は結局誰にとっても、最後にはあまりはつきりとした場所ではなかったということになる。思うに、この世は、天国の代わりに選択されれば、結局最初からずっと地獄の一部だったということになるだろうし、逆に天国を優先させる者にとっては、最初から天国の一部であったということになるだろう。(Divorce, p. 7)

天国と地獄との間の選択において地獄を選ぶということは、ここではわれわれのいういわゆる悪ではなく、あらゆるこの世のもの、名誉、自己義認からくる満足感、自己中心的な愛などに執着してそれらを神に優先し、神の第一義的重要さを認めようとしめない態度として描かれている。この世で通常は徳と見なされる母の愛や宗教的探求でさえも、それが生きる第一目的になって改悛とイエス・キリストの救いを求める謙虚さへの道を妨げる場合には、悪と見なされる。この世で<正しく>生きたと自負する人々は、その自己義認により神の救いを拒否し、天国にも行かないことになる。そして、逆説的に、殺人を犯したものでさえも、真に改悛してしまえば、天国に至ると考えられている。むろんこれは、十字架のキリストが隣の十字架で死んでゆく改悛した罪人に「はっきり言うておくが、あなたは今日わたしと一緒に楽園にいる」(ルカ23:43)¹⁷⁾と言ったキリストの言葉に合致し、キリスト教の教義に沿ったことである。こうしたルイスの態度は、この世の現実の悪、戦争や殺人の残虐さに照らしてみれば、観念的すぎると思われるかもしれない。『天国と地獄の離婚』は実際、「例を挙げて説かれた訓戒」¹⁸⁾と評されるほど、物語性よりも教訓的な要素が目立つ作品である。これは、ルイスが読者に天国への選択を行わせるために、人間の信仰を阻む心理的動機を地獄の選択という形で描くことに焦点を当てているためであろう。

『痛みの問題』で、地獄についての考察のあと、ルイスは、「この章は、あなたの妻や息子についてのことで、ネロやイスカリオテのユダのことでもありません。これは、私と、あなた自身にとっての問題なのです」(p. 116)と

書いているが、彼の扱う悪と救いの問題は、この世の生を終えた後の世界で永遠の生を与えられるべき個人一人一人の救いの問題であり、そこで最も重要な問題となるのは、この世での肉体的苦痛やこの世の悪の総体ではなく、個人個人の精神の状態である。

ここで、われわれは、キリスト教文学のひとつのパラドクスを考えることが出来る。人間の罪と改悛、救いを扱った文学においては、ことにその罪人が主人公となっている場合、被害者の苦しみよりも、罪を犯した者の精神的な救いの問題に焦点が当てられる。そして、罪人が改悛してキリストに帰依した場合、そこには救いがある。つまり、行為としての悪の大きさにかかわらず、救いがあるのである。また、苦難のうちに死んでゆく無垢な人々の物語においてさえも、その人々に天国の平安が約束される場合には、それは究極的な悲劇とはならない。キリスト教文学には、それゆえ、真の悲劇はありえないのかもしれない。もしあるとすれば、それは、改悛がただひとつの救いの道であると信じつつ、改悛が出来ない者の悲劇である。これは、グレアム・グリーンの『情事の終わり』(Graham Greene, *The End of the Affair*)などに描かれるものであるが、ルイスの場合、自分の悪に気づいた人物は必然的に改悛し、改悛には必ず救いが伴っている。そうした意味で、ルイスの作品は楽観的すぎるか、単純すぎると見なすことも出来ようが、それは、彼の信仰と救いに対する信念を反映するものとも考えられよう。

悪は非実在である

ルイスは、アウグスティヌスに従って、悪は善の歪曲であり結局は「無」に等しいと考えた。『天国と地獄の離婚』では、登場人物の口を通して「地獄は心の状態である。しかし、……天国は実在そのものである」(Divorce, p. 69)と言う。ここでは天国からやってくる聖霊が皆、堅固な肉体をもつものに対し、地獄から来た幽霊は、「天国の明るい空気のうえに落ちた人間の

形のしみ」(*Divorce*, p. 27) と描写され、地獄は影のようである。しかも、「地獄は全部合わせても地上の小石ひとつ分の大きさもない。…しかし、「実在の世界」と比べれば、分子ひとつ分もない」と言われる。そして、その小ささと非実性はたとえて、天国の蝶が地獄を丸呑みしたとしても、「地獄はあまりに小さいものだから、蝶に害を及ぼすことも、何かの味がすることもないだろう」(*Divorce*, pp. 122-123) と表現されている。

『悪魔の手紙』で、悪魔スクリューテープは次のように言っている。

人間達はわれわれが彼らの心に何かを吹き込むことばかり想像するが、おかしいではないか。実際、われわれの最上の仕事は、物事を彼らの心から締め出すことによって成功するのだ。…彼らが敵なる主に耳を傾けている限りわれわれには敗北しかない。しかし、そうさせない道はある。もっとも単純な方法は彼らの目を神から彼ら自身へと向けさせることだ。
(*Screwtape*, p. 25)

この言葉は、ルイスにおいてすべての実在は天に属し、悪は悪という実在があるわけではなく、善との断絶あるいは歪曲にすぎないということを、悪の側から明らかに述べたものである。

悪の本質は傲慢の罪である

ルイスの作品に現れる悪の顕著な性格はプライドである。『ナルニア国年代記』においても、悪の根源にはキリスト教で最も重い罪と考えられている「プライド」つまり「傲慢」の罪がある。

『ナルニア国年代記』で「傲慢」を最も明らかに示しているのは、『魔術師の甥』の魔女ジェイデイスである。彼女は姉と王位を争って勝ち目薄になると、自分のものにならないくらいなら、世界そのものを滅ぼしてしまう。しかし、彼女の考えでは、悪いのはすべて姉で、自分には何も非はない。彼女は

姉が悪いのだ。私はいつでも和を結ぶ用意が出来ていた——そうだ、そして、姉の命を見逃してやることも。王位を私に譲りさえすれば良かったのだ。それを姉は拒んだ。姉の傲慢さが世界を滅ぼしたのだ。(Magician's, pp. 59-60)

と言うが、実際に傲慢であるのは姉よりもむしろジェイデイス自身なのである。ルイスの描く悪は善が理解できず、自己の悪を他にも投影して、他人も自分と同じ悪い性質をもっていると考える。ここでのジェイデイスは、自分の傲慢さを姉に投影して見ているのである。傲慢な者ほど、相手が傲慢に見えて我慢がならないというのが、ルイスの洞察なのである。同作のアンドリューは自分が偉大な魔術師で他の人間の運命を左右する権利を持つと考えている。しかし実際は、無力で滑稽で、最後にはナルニアの動物たちに捕まって笑いものにされてしまう。彼はジェイデイスのパロディーとして、彼女の一見偉大な言葉が実は滑稽で、ただの自己中心的な悪にすぎないことを際立たせ、読者に気づかせる。

『馬と少年』では、アラビスや馬のブリーのプライドが、シャスタや雌馬のフィンとの謙虚さと対比的に描かれている。アラビスやブリーは尊大に自分の血筋の良さを強く意識している。しかし、そのプライドは結局ただの虚栄である。アラビスは身分を隠しているためにタシバーンの町で貴族の娘としての敬意を払って貰えないが、その時、それを不快に思いシャスタに、「本当なら私は輿に乗って兵士たちを前に、後には奴隷を従え、ティスロック王の宮殿の大宴会にでも行くところなのよ。……こんなふうに忍び込むのではなしに。あなたとは違うのよ」(*Horse*, p. 51) とこぼす。ルイスは『「失楽園」序説』において、ミルトンのサタン傲慢さは彼を差し置いてキリストが神に挙げられた時に、「自分の価値が損なわれたと感じたこと」に典型的に表れていると指摘しているが、(*Preface*, pp. 95-96) ここでのアラビスの不満も、「自分の価値が損なわれた」と感じるサタ

的な傲慢さからきている。ブリーは、自分の姿を過度に気にしたり、(*Horse*, p. 176) 軍馬であることを鼻にかけてフィンに対して威張ったりするが、(*Horse*, p. 117) それは皆、実の無い虚栄心に過ぎない。実際に勇敢なあるいは気高い行為をするのは、シャスタであり、フィンである。

ルイスにおいて、プライドは、いかなる場合も看過されず、悪として扱われている。それは、SF三部作の三作目『かの忌まわしき砦』のジェインの場合にも当てはまる。彼女は、宇宙規模での善と悪との戦いで善の側の重要な戦力になるべく夢見の能力をもって生まれ、本質的に、善の領域に属する。しかし、彼女のうちにもまだ、改め、贖わなければならない罪があった。彼女には干渉を嫌い自分の自我を守り通したいという強い願望があった。結婚した時も、「自分自身の人生は失うまい」(*Hideous*, p. 72) とした。彼女は結婚は両性の完全な平等の上に立つものと考え、自分が夫と敵対する軍勢に加わろうと加わるまいと、夫とは関係がないと思っている。彼女は「平等」を互いに対する責任のなさを取り違えているのである。また彼女は束縛を嫌うゆえに子供も作らない。彼女は、一度は善軍に加わることを拒否するが、それも、自分を他人の手に委ねることに反発したからである。自分自身でありたいと願う気持ち、「自己自身において存在したい」と願う気持ちは、「自己を自己の根源とする」気持ちに通じる。これは、先に見たアウグスティヌスの指摘にある(ラテン・キリスト教で見られるところの)人間の原罪の核であり、「傲慢」(プライド)の罪である。¹⁹⁾ 善の側の指揮者ランサムは、そういう彼女の「傲慢」を指摘して、結婚は平等などではなく、互いに対して従順である関係であると説く。

ルイスは、天国では皆が平等なのだが、それは、常に皆が同じであるというような固定した平等ではなく、互いに対する「自己放棄」(*Pain*, p. 140)の原理によって、常に上下関係

や役割が変わるダンスのような動きの中の平等であると見ている。(*Hideous*, pp. 148-149; *Perelandra*, p. 217) それは、自己中心性と自己執着が悪と見なされたことの、逆である。そして、ここには、彼の現代民主主義批判までがうかがえるのである。

民主主義とはもともと、政治における選挙の一形体である。それは、「すべての人間は平等に扱われるべきである」という政治理念を基礎とする。しかしその理念は今や、「すべての人は平等である」という信念へと変わってしまった。(*Toast*, p. 18) そしてこの、「すべての人間は平等である」という信念は、自分より優れた人間に対する嫉妬心を肯定することにつながると、ルイスは考えている。

『悪魔の手紙』で、人間の誘惑の手管を説く悪魔、スクリュートープは、このように言っている。

「民主主義」という言葉を用いれば、[被誘惑者に]、人間の感情のなかでも最も卑しい——そして最も不快な——感情を良いものであると考えさせることが出来るのであります。「民主主義」という呪文に守られていなければ、いつでもどこでも嘲りの対象となる行為を、恥じるどころか、確信に満ちた自己義認とともに行なわせることが出来るのです。

その感情とはもちろん、人間に「おまえの方が俺より偉いわけではない」と言わせる感情のことです。(……) 純然たる政治の領域でのことを除けば、平等を要求するのは常に、何かの点で劣等感のある者だけです。……これは、人間たちにも「嫉妬」という名では、もう何千年も知られていることです。(*Toast*, pp. 18-19.)

善を味わう能力の喪失

ルイスは、傲慢の罪が不可避免的に善との隔絶を伴うことを繰り返し見せている。これは、小説やファンタジーにおいては、まず、善いものを楽しむ能力の欠如あるいは、喪失という形であらわれる。『最後の戦い』において「小人は小人のために」(*Last Battle*, p. 135) 生きることを選んで創造主アスランを拒否した小人達は、アスランの国に通じる扉をくぐっても、そ

ここにただの闇しか見ない。彼らはアスランの国を見る信仰の眼を捨てて自分から善(光)と疎外された状態を選んでしまっているからである。これは、善の源を拒否し、善を受け入れる能力を失った者、神の光を拒否する者の姿を象徴的に表わしている。少女ルーシーがそれを哀れむと、アスランはルーシーに、「私ができることとできないことを両方見せてあげよう」(Last Battle, p. 135)と言って、小人達に御馳走を出してやる。しかし、小人達は、それが食べ物であることは分かったものの、パイもタンも鳩肉も、ただの古い蕪やキャベツの葉にしか感じられない。それは、小人達が、アスランの恵みに対する受容力の源、つまり信仰を、完全に捨ててしまっているからである。彼らは食物という形で物理的な恵みは受け取ることは出来ても、食べ物を楽しむという精神的な恵みは受け取ることは出来ないのである。アンドリューが、アスランの歌う創造の歌を聞いても、ただの吠え声としてしか理解できないのも、やはり、アスランを拒否しているからである。(Magician's, pp. 116-117)『われわれが顔を持つまで』は、ギリシア神話のアモルとプシュケの話の翻案であるが、プシュケの姉である主人公オリュアルは、妹が神の花嫁になったことを自分でも気づかぬうちに内心で嫉妬し、認めたくないと感じている。今まで自分に従順であったプシュケが、神の花嫁として自分よりも優れた存在になることが、許せない傲慢さもある。そこで彼女には、プシュケの神の城も見えず、プシュケが差し出した蜜菓子とワインも、ただの果物と水にしか感じられないのである。(Till We, pp. 104; 119) これは、傲慢さから神の真実に対して心の目を閉じた彼女が、肉体的な眼でも実在する城が見えなくなっただけでなく、蜜菓子とワインという良いものを真に味わうことが出来なくなっていることを見せる。そしてここでは、蜜菓子とワインが聖餐を思わせ、オリュアルが神の恵みに与っていないことが特に強調されている。

良いものからの自己疎外とは、喜びや物質についてだけでなく、良い人々からの自己疎外をも意味する。アンドリューは、「われわれは、平凡な喜びから切り放されている。われわれの運命は、気高く孤独なのだ」と言っているが、実際、気高さは別として、彼は、自分の孤独さを知っていることだけは正しいと言える。彼が孤独なのは、彼が自ら他人との人格的交わりを断っているからである。『ライオンと魔女』のエドモンドは魔女に砂糖菓子で釣られて兄弟を裏切ろうとするが、その間は兄弟から孤立した精神状態にあるし、誰よりも顕著な例としては、『朝開き丸東の海へ』でのユースタスがあげられる。彼は何事に付けても自己中心で、船に水が足りない時も自分だけは十分の飲み水を与えられてしかるべきだと思い、水を盗もうとする。与えられた船室についても食べ物についても、不満ばかり抱いている。自分のことしか念頭に無いので、皆が我慢していることも分からず、自分だけが虐待されているように思うのである。後にユースタスは、皆が働いている間に一人だけ楽をしようと皆から離れるが、眠っているうちに竜の姿に変わってしまう。これは、彼の内面が、外面化して現れたことに他ならない。ペインも指摘するように、「竜は財宝を貯えているわがままな怪物であるのみならず、非常に孤独な生き物だ」²⁰⁾からである。

傲慢の罪が善からの疎外を伴うことは、ルイス独自の考えでも、新しいものでもない。ミルトンの『失樂園』で墮天使サタンは神から「疎外された、のろわれた霊」²¹⁾と呼ばれている。サタン自身、自分の疎外を次のように認識している。

なんと惨めなことか！どこへ飛んでゆこうとも無限の怒りをうけ、無限の絶望しかないのだろうか？

どこへ行こうとも地獄、私自身が地獄なのだから。

改悛する場はないのか？

残された赦しはないのか？

屈従によるしか赦しは得られない。しかし侮蔑と

恥を恐れる気持ちが、私に屈従を許さないのだ。
(IV, ll. 73-82)

ルイスは中世ルネサンス英文学者であり、ミルトン学者でもあった。そして、神から離反し、神から離れた疎外状態が地獄であるという思想は、このように、キリスト教の伝統、キリスト教文学の伝統として、ルイスにも受け継がれていると分かる。究極の悪がルイスにとってこのようなものであったということは、痛みの問題を考える時に忘れてはならない。

人間廃絶

ルイスは道徳を三つにわけ、人間同士の関係において、人間個人の内面において、そして人間と神との関係において考えている。(Mere Christianity, p. 67) 彼は、道徳を、永遠かつ普遍の絶対的な善悪の基準に基づく真理と信じており、『人間廃絶』において、現代の傾向として、美的感性や道徳を客観的価値の基準である絶対的な真理としてではなく主観的、相対的なものと考えた向きがあることを批判している。(Abolition, p. 14)

『かの忌まわしき砦』では、善との隔絶がこれら三つの道徳の崩壊と結びついて強調されている。ここで悪を具現しているのは、NICEと呼ばれる、科学による人間支配を目指す集団であるが、NICEにおいては、人間同士の道徳は、完全に無視されてしまっている。そして、同様に、人間個人個人の内面の調和という形での道徳も、無くなってしまっている。NICEの首脳陣は、他者の個人性を剥奪し、画一化した被支配者にしようとするが、そのみでなく、自らも人格であることを放棄していく。顕著な例はウィザーである。日常の彼は次のように描写されている。

彼は生きることから意識を取り去り、心の一部のみ使って事務を行なう業を身につけていた。色、味、匂い、触感などは、彼の体の感覚を正常に刺激することはしたが、彼の自我に迄は届かなかった。五十年來の習慣と他人に対する態度は今や、蓄音機のようにほとんど独立して機

能する機械となっており、彼は会談だの会議だのといった日常の仕事をすべてそれに任せておくことができた。(p. 250)

『ペレランドラ』で、悪の化身は<非人間>と呼ばれ、ほとんど眠らなかった。そしてウィザーも、ほとんど睡眠を必要としない、機械のような「非人間」となっているのである。

またフロストも、自分から人格であることを嫌い、人間であることを放棄したひとりである。彼は世界をすべて化学反応として見ている。彼にとっては自分の思考ですら単なる化学反応であり、彼は、自分が魂を持つことも信じない。そして、自由意志も、人間が責任を持つ存在であることも認めないのである。彼はもう長年唯物論者であり、「頭のなかに動機や意図として表れることは、単に肉体的行為の副産物にすぎない」(Hideous, p. 357) と考えてきた。それは彼にとって、最初は単なる理論でしかなかった。しかし、彼はNICEに来て以来、実際に自分の理論通りの者になってゆくのである。

ますます、彼の行為には動機がなくなってきていた。彼はあれこれのことは行ない、これこれのことを言ったが、それがなぜなのかは分からなかった。彼の心は単なる傍観者であった。彼は、一体なぜそのような傍観者がいるのかも分からなかった。その存在が苦々しかった。それも、一方では、苦々しい思いなどは、単なる化学現象にすぎないと自分に受け合いながらである。(Hideous, p. 357)

ただ一度、彼の心に、「自分が最初から間違っていたのかもしれない。魂や人格としての責任は、存在するのかもしれない」(p. 358) という考えがよぎるが、彼はその考えを嫌い、それを認めるよりも自殺を選ぶ。しかも、「魂であるという幻想は、死んでも結局治らないかもしれない」(p. 358) と考えながらである。フロストにおいてルイスは、唯物論に徹した者が、他人や神に対しても、また自分自身に対しても、魂の持ち主としての責任を放棄していることを極端な形で描いている。そしてこのように、

NICEでは、道徳は、他人に対しても自己においても神に対してもすべて無視されてしまっているのである。

また、『人間廃絶』でルイスは、道徳律によって統制されない科学技術は、結局、少数の者に悪用され、他の人々の非人道的支配につながると指摘している。道徳という客観的善(善の根源は神である)から離反した態度が、重大な悪に他ならないことを彼は次のように論じ、それを『かの忌まわしき砦』で描いて見せているのである。

人間の自然支配とは、もしも一部の科学的計画者の夢が実現するならば、ほんの何百人かの人間が無数の者を支配することを意味する。人間の支配力がただ増えることはないし、あり得もしない。人間によって勝ち取られた新しい力は、皆、人間を支配する力でもある。……優生学や、妊娠中の条件付けや、完全な応用心理学に基づく教育や宣伝によって、人間が人間自身を完全にコントロールできるようになった時、最後の段階が来る。人間性(human nature)が、自然の中で最後に人間に屈する部分となるであろう。……なぜなら、人間が自分達を好きに変えられる力とは、何人かの人々が他の人々を思い通りに変えられる力を意味するからである。(Abolition, pp. 71-72)

「幸福な墮罪論」の否定

18世紀にライプニッツは、この世の悪を見ながらも、善と悪とのつり合いを考えれば、これは「ありうる限り最高の世界」であると考え、「アウグスティヌスに従って、神が善をもたらすために、つまり、より大きな善をもたらすために、悪を許したという見解を取っている」ことを認めている。「より大きな善」とは、ライプニッツによれば、神が人間に自由意志を与えたことと、アダムが墮罪を犯した結果、「神の御子の受肉という途方もない益によって、その罪が贖われた」ことの、二点である。²²⁾ アーサー・O・ラヴジョイは、神が悪からかえって

大きな善を生み、悪も善も神の摂理のうちで、大きな善の一部となるという考え(これを彼は「幸福な墮罪」(felix culpa) 観と呼んでいる)を、アウグスティヌスやアンブロシウス(4世紀)などまで辿り、「ミルトンと幸福な墮罪のパラドクス」で、罪であるはずの墮罪が肯定されるパラドクスが、ミルトンの『失樂園』の結びにあるが、これはミルトンの奇想ではなく、少なくとも四世紀にまで遡れるものと指摘している。ラヴジョイの「幸福な墮罪」論の説明は明解である。

敬虔な信者ならば誰も、人間の救済という感動的なドラマが起こらなかったほうが良かったなどとは考えられないだろう。それゆえ、敬虔な信者ならば誰も、矛盾無しには、そのドラマの第一幕、すなわち、ドラマの残りの部分がすべて生じる源となった出来事が真に悔やまれるべきものであるとは考えられないだろう。さらに、贖われた者達の最終的な状態、人類の歴史の成就、は、至福や道徳的卓越の点で、エデンの園の最初の二人の無垢な幸福と罪の無さをはるかに凌駕するであろうが、墮罪が起こっていなかったならば、人間はおそらくその二人の状態にとどまっていたであろう。それゆえ、アダムの子孫の罪は——そして、実際、アダムの罪が「引き起こした」彼の子孫の罪も——神の栄光のより偉大なる顕現と、人間が得た、墮罪が無かったならば絶対に得られなかったと思われるほどはるかに大きな恵みとの、その両方の、必須条件だったのである。²³⁾

アウグスティヌスの次の考えも、この<幸福な墮罪>観に通じるとみられる。

悪しきものは、悪であるという点における限り、善ではない。しかしながら、善と悪との両方が存在するということは、善いことである。……神の御業は賢く巧みな計画によってなされ、天使や人間が罪を犯す時、つまり、神が意図したことではなく自分たちの望むことを行い、自分たちの意思で、創造主なる神の望まないことを行う時、そこから神の意図したことを成就するのである——神は、至高の善であるゆえに、悪でさえも善に利用し、正当に罰に定めた者を地獄にやり、慈悲により至福に定めた物を救うために使うのである。²⁴⁾

しかし、ラヴジョイも指摘しているとおり、²⁵⁾

幸福な墮罪という考え方は、尽き詰めれば、墮罪の肯定か、あるいは墮罪までを神の摂理とする考えにつながりかねない。実際、聖アンブロシウスはアダムの罪が「害よりもむしろ大きな利益をもたらした」²⁶⁾と言っている。そしてこれは、護教論上でずっと問題とされてきたことでもある。英文学史上で「幸福な墮罪」観が最もはっきりと述べられているのは、ラブジョイが取り上げ、また、ルイスが学者として研究し、解説書『失樂園』を書いているミルトンの『失樂園』であるが、そこでは、墮罪を犯したアダムが大天使ミカエルに、自分の子孫たちの歴史を見せられる。アダムは、自分の罪が、神の受肉と受難、復活とによって贖われ、神を信じる者にはアダム自身が樂園で享受していたのよりもさらに大きな恵みがもたらされることを知り、次のように神を賛美するのである。

ああ、無限の善！ 大いなる善！
これほどの善を悪から生み出され
悪を善に変えてしまわれるとは。最初に創造によって
暗闇から光を産み出されたのよりも
さらに驚くべき御業！ 私はまったく分からない
自分が犯し、もたらした、罪を私は今
悔やめば良いのか、むしろ、はるかに
喜ぶべきか。ずっと大きな善がそこから生まれ、
神にはより大きな栄光、人々には神からのいや増す善意、
そして怒りをこえて恩寵が満ちあふれるのだから。

(『失樂園』12巻、469-478)

これは、「聖土曜日のためのミサの祈り」(the Mass for Holy Saturday)の一節、「ああ祝福された罪よ！これほど善なるこれほど偉大な贖い主に報われるとは！」の、ミルトンの解釈であるといわれる。²⁷⁾しかし、ルイスはミルトンとは異なり、あくまでも、墮罪は悪以外の何物でもないことを強調している。

傷ついたものを癒すこと、そして曲がったものを正すことは栄光の新しい様相だ。しかし、まっすぐなものは曲がるために作られるのではなく、全体は傷つけられるために作られるのでは

ない。(Perelandra, p. 209)

ルイスは『痛みの問題』で、受肉や贖罪に劣らぬ恵みは墮罪がなくとも与えられたであろうと言い、「もしも、人間以外に理性を持った種族が、実際の宇宙のどこか別のところに存在しているならば、彼らもまた墮罪を犯しているだろうと考える必然はない」(Pain, p. 7)と述べている。ここでは悪の問題にしほり、墮罪を免れた善の様相をルイスがどのように考えているかは、詳しく論じないが、SF三部作の最初の二作で彼がそうした無垢な種族を描き、まっすぐなものは曲がるために作られるのではないということを示していることだけ、指摘しておきたい。

悪は神の道具になる

ルイスは『痛みの問題』で悪は神の道具になると言っており (p. 99)、彼のファンタジーやSFには、至る所でそのモチーフが見られる。キリスト教の考えるイエスの贖罪に最も近いものは、童話ナルニア国物語シリーズの第1巻『ライオンと魔女』での魔女であろう。エドモンドが兄弟を裏切った時、彼女は彼を殺すことが出来た。ナルニア国では、天地創造の昔より、すべての裏切りは死で報いられると、定まっていたからである。魔女は、その死刑執行人になる権利を持っていた。しかし、創造主アスランがエドモンドの身代わりとして自ら進んで魔女に殺される。その時魔女は、一旦はアスランを殺し、勝利したように見えるが、結局アスランは蘇り、彼女を滅ぼしてしまう。そして、魔女は単にエドモンドの罪の贖いに力を貸したにすぎないことになる。サタンが人間を誘惑したことが、結局キリストによる贖罪につながり、人間を被造物から神の子へと引き上げたように、彼女は自分でも知らないうちに創造主の道具となっているのである。

また、『ペレランドラ』は旧約聖書「創世記」の樂園喪失の物語に材をとり、金星の最初の女

王がサタンの誘惑（あるいは試み）に会い、しかも墮罪を免れる過程を想像した話であるが、ここでも、悪魔は意図せず神の役に立っている。女王は全くの無垢の状態から、悪魔との会話を通して自分が自由意志を持つ存在であることに気づき、神から自立する選択肢ももつことを初めて知り、知った上で自分から、神に従う道を選ぶまでに成長する。そしてこの、樂園喪失回避の物語において悪魔は、女王を、神に対する原初の自然な服従から、自由意志による服従に導く結果となっている。つまり、現実世界で神が最初に意図し、アダムとイブの原罪によって阻まれたより良い服従に導く道具となっているのである。そして、悪自身は、自由意志による服従が善であるということにさえも、気づかないのである。（アウグスティヌスの「悪は無である」という教義と矛盾せず、ルイスは悪を、常に、善よりも弱いものとして描いている。知性と認識力においても、悪は、本質的に善よりも弱いのである。）

彼女は言う。

眠りを理解するのは覚めているときで、眠りは覚めていることを理解できません。若さのせいで悪が分からないことがあります。でもそれより暗い、悪を行っていることからくる無知もあります。寝ている人に眠りが分からなくなるように。…… 私達を若さからくる無知から連れ出したのは、あの悪い人自身でした。でも、あの暗い心の人、自分が本当は何をさせられる為にペレランドラに来たのか、実は分かっていたのです。（*Perelandra*, p. 209）

神のメガフォン——新生に伴う痛み

そして又、ルイスの作品において重要なのは、新生に伴う痛みである。ユースタスは、ある日自分勝手に仲間から離れ、竜になってから、初めて、今までの自分の生き方を反省するようになる。つまり、竜の姿にされたことは、ユースタスを正しい道に呼び戻すメガフォンの役割をしたのである。そして、彼が悔い改め、皆の助けをするようになり、愛し愛される喜びを知つ

た時、アスランは彼に、竜の衣を脱ぐように命じる。しかし、ユースタスが何度脱皮してみても、その下から現れるのはひとまわり小さな竜の姿であった。人間の姿に戻るためには、アスランの爪で竜の皮を引き裂いてもらわねばならない。そして、それには激しい痛みが伴うのである。竜の姿に象徴されるわれわれ人間のわがままな自我は、容易には捨てられない。ルイスは『キリスト教の精髓』において、人間が生れつきの自己中心性を捨て、古い自我に死んで神の子として新生に与ることを、ブリキの兵隊が一度神の手で壊されて人間として作り変えられるのになど、われわれはむしろ壊される苦痛を逃れたいと思うであろうが、その苦痛は、新生に与るには避けられぬものであると言う。（*Mere Christianity*, pp. 151-152）われわれが経験すべき転換は、単なる変化を越えた生まれ変わりである。殺される古い自我にとっては、辛く、しかも自分自身の力を越えた秘蹟なのである。ユースタスがアスランに身を委ね、竜の皮を取り除いてもらわねばならなかったように、われわれも、キリストに対する完全な自己放棄によって作り変えてもらわねばならないということなのである。

こうした、徹底的な外科手術にも似た痛みは『天国と地獄の離婚』で、ある幽霊が、天国に行くためには自己中心の自我を殺してもらわねばならず、そのために天国から来た聖霊の手に身をゆだねる時の苦しみにも見られる。しかしその苦しみに耐えた結果、幽霊は輝くような、「天使ほども大きい巨大な男の人」（*Divorce*, p. 102）に生まれ変わるのである。

小説における独自の扱い——成長の糧としての苦難

ルイスは、護教論では、もっぱらアウグスティヌスの自由意志論によって悪の問題に答えていた。しかし、小説、特にファンタジーのナルニア国物語やSF三部作においては、自由意志論による墮罪だけでは説明のつかぬ苦難が描か

れている。先の論文でも述べたように、『馬と少年』の少年シャスタは、命がけで貴族の娘アラヴィスを救ったばかりで、また隣国の王の所まで走る任務を与えられる。そして、語り手は、ひとつ良いことをすると、その褒美はしばしば、「もっと辛い、もっと良いことをしなくてはならなくなる」こと (Horse, p. 124) だと言っている。これは、苦難を成長の糧と見なす、イレナエウスの見方であろう。

『ペレランドラ』でも、主人公ランサムは、苦難を通して、自分の自由意志と神の摂理とが一つとなるまでの成長を遂げる。最後に彼が悪魔と体をもって戦うに至る時には、彼の意思が信仰のうちに、神の意思と一つとなって、彼を自発的に動かすようになっている。ランサムは、「摂理と自由は明らかに同一のものである」 (Perelandra, p. 149) 事を悟る。聖アウグスティヌスは、聖書に「正しい者は信仰によって生きる」(ローマ人への手紙1・17) とあるのを引いて、われわれは善を知るにも善を行なうにも神の助けを必要とする、そして、その助けは神に対する信仰と祈りによって与えられるのだと、説いている。²⁸⁾ そしてまた、贖われた者の自由意志は、罪を犯し得ないものであらうとも言っている。²⁹⁾ それは、信仰を以て善を行なう者には、罪を犯し得ない意志、神の意志とひとつである意志が、賜り物として与えられるということである。戦いを決意したランサムは「私の名もまたランサムである」 (Perelandra, p. 149) という声を聞くが、その声はかつてメシアとして地球を贖った御子キリストの声である。つまり、彼は、苦難を通して、真の再生と成長を遂げ、聖パウロの言う「栄光から栄光へと、主と同じ姿に作り変えられていく」(コリントの信徒への手紙2 3: 18) 過程を成就するのである。

この、苦難を通しての栄光への変容は、『われわれが顔を持つまで』の神話的モチーフに、ことに象徴的に表されている。主人公オリュアルは際立って醜い顔で生まれたが、妹を破滅させ、

神と敵対した苦しみのうちに、自分の傲慢さと自己中心性に気づき、神に帰依することで生まれ変わる。その時に、彼女は気づくと美しい妹と瓜二つの栄光の姿に変えられていたのである。

そしてまた、ルイスの特徴は、ルイスの神が、われわれの罪の贖いの行為においても、助けてくれる神、贖罪を共にしながら、われわれを成長させてくれる神であることである。たとえば『魔術師の甥』で、ディゴリーは、過度の好奇心から魔女をナルニアの世界に連れてきてしまい、その贖いに、悪を遠ざける魔法のりんごを取りにゆく使命を与えられる。ディゴリーの母は病気で、そのりんごをナルニアに届ける代わりに、人間世界に盗んで帰って母親に食べさせればその病気は治ると、魔女はディゴリーを誘惑する。しかし、その誘惑を乗り越えて、アスランとの約束通りりんごをナルニアに持ち帰った時、そして、もう母の命を救う道はないと思ってディゴリーが悲しみに押し潰されそうになった時に、アスランは誘惑を退けたディゴリーの勇氣に報い、命のりんごを彼に授けるのである。ルイスの神は罪に対しては必ず贖いを求める。ルイスは『痛みの問題』において、単なる時の流れは決して罪を洗い流しはしないと言っているが (Pain, 49)、それは、罪は贖われるまで消して消えないからである。しかしその一方で、神は、その贖いの遂行には助けを与え、(ディゴリーの場合はりんごを取りに行く為に天馬が与えられる) しかも、贖いの成就とともに、単なる許し以上の大きな恵みを与えてくれるのである。ルイスは「幸福な墮罪」という考えは退けたが、常に、神はどこまでも正義の神でありながらしかし正義以上の愛の神であると信じていたので、結果として、墮罪から大きな恵みが生まれるのである。

論理的護教論を超えて——結び

小説では哲学と違い、善は好ましく、幸せになる、ということ、血肉の通ったいわば挿絵

つきの形で見せることが出来る。ルイスが必ずしも現実に、善がすべて幸せになると見ていたとは限らない。ただし、人が幸福か幸福でないか、心理的苦痛を味わっているかいないかということは、多くの場合、客観的事実によりも、その人の心理的態度（心の持ちようといっても良い）に左右されるものであるから、小説によって、善は好ましく幸せに通じるということを真理として読者の感性に受け入れさせてしまえば、読者は善を志向するようになり、善であるということ自体によって、幸せになるということもあり得る。肉体的疾患や、美醜、年齢などの客観的事実自体は、気の持ちようで変わることではない。しかし、それに対する態度が変わることによって、その疾患や、美醜、年齢が当人にとって善となるか悪となるかが変わることはあるからである。そして、何よりも、この世を超えた永遠の大きな実在の世界全体の枠組みで考えれば、善は必ず悪よりも幸せになると信じるの方が正しいかも知れず、少なくとも、ルイスの小説やファンタジーを読んでいると、そのように思われてくる。ルイスは、文学の役割として、当たり前の良い道徳感情を読者に学ばせること、たとえば「愛は甘く、死は苦々しく、徳は愛らしく、子供たちや庭は楽しいもの」(Preface, p. 57)であることを、読書体験を通じて身を以て学ばせることをあげているが、ルイスのナルニアやSFの世界は、その役割を実際に（少なくとも、いくらかの読者にとっては）果たしているものである。しかも、重要なことに、ルイスの話において善が好ましく描かれているのは、彼が道徳的效果を意図したからではなく、「自分の書こうとしている明るい休日のような話には、幸福な結末がふさわしいと考えた」(“A Reply to Professor Haldane,” *On Stories*, p. 69) からなのである。ルイスは悪を善の歪曲者、あるいは、敗北者として描き、また『幸福な墮罪』の考えも否定して、神の絶対性と義とを強調している。ルイスの描く悪は、現実にわれわれが会える容赦無い悪の

強さを持たないという点で、思弁的にすぎるといえるとも言えようが、神話の世界、真理の世界では、結局悪は敗者であり弱いものである、というルイスの信念がそこには表れているのである。

注で用いたルイスの著書の略語 ならびに題名の訳

- Abolition: The Abolition of Man: Reflections on Education with Special Reference to the Teaching of English in the Upper Forms of Schools.* Macmillan, 1947; paperbacks, 1955. (『人間廃絶』)
- Christian Reflections: Christian Reflections.* Ed. Walter Hooper. Eerdmans, 1967; rpt. 1982.
- Divorce: The Great Divorce.* Macmillan, paperbacks, 1946. (『天国と地獄の離婚』)
- God: God in the Dock: Essays on Theology and Ethics.* Ed. Walter Hooper. Eerdmans, 1970.
- Hideous: That Hideous Strength: A Modern Fairy-Tale for Grown-Ups.* 1946; Macmillan, paperbacks, 1965. (『かの忌まわしき砦』)
- Horse: The Horse and his Boy.* 1954; Penguin, 1965; rpt. 1975. (『馬と少年』)
- Last Battle: The Last Battle.* 1956; Penguin, 1964; rpt. 1976. (『最後の戦い』)
- Lion: The Lion, the Witch and the Wardrobe.* 1950; Penguin, 1959; rpt. 1976. (『ライオンと魔女』)
- Magician's: The Magician's Nephew.* 1955; Penguin, 1963; rpt. 1976. (『魔術師のおい』)
- Mere Christianity: Mere Christianity.* 1952; Collins, 1955; paperbacks, 1977. (『キリスト教の精髓』)
- Pain: The Problem of Pain.* 1940; Collins, 1957; paperbacks, 1977. (『痛みの問題』)
- Perelandra: Perelandra: A Novel.* 1944; Macmillan, paperbacks, 1965. (『ペレランドラ』)
- Preface: A Preface to 'Paradise Lost'.* Oxford Univ. Press, 1942; paperbacks, 1960; rpt. 1979. (『失楽園』序説)
- Screwtape: The Screwtape Letters.* 1942; Collins, 1955; paperbacks, 1977. (『悪魔の手紙』)
- Silent Planet: Out of the Silent Planet.* 1938; Macmillan, paperbacks, 1965. (『沈黙の惑星を離れて』)
- Studies: Studies in Medieval and Renaissance Literature.* Cambridge Univ. Press, 1966; paperbacks, 1979; rpt. 1980.
- Till We: Till We Have Faces: A Myth Retold.* 1956; Harcourt, paperbacks, 1980. (『われわれが顔を持つまで』)
- Toast: Screwtape Proposes a Toast and Other Pieces.* 1965; Collins, 1965; paperbacks, 1977. (『悪魔の演説』)

注

- 1) 2世紀中旬。生没年不詳。
- 2) アウグスティヌス「基本書と呼ばれるマニの書簡への駁論」『アウグスティヌス著作集7——マニ教駁論集』岡野昌雄訳(教文館, 1979), 第35章pp. 161-162.
- 3) アウグスティヌス『神の国』(三) 服部英次郎訳(岩波文庫, 1983), 12巻22章, pp. 161-162. また, (三) 13巻1章, p. 177 第も参照のこと。
- 4) アウグスティヌス『神の国』(三) 12巻6章
- 5) アウグスティヌス『神の国』(三) 12巻6章, p. 105.
- 6) Lucretius, *De Rerum Natura*, with tr. by W.H. D. Rouse, second ed. in Loeb Classical Library (Harvard Univ. Press, William Heinemann, 1982), pp. 394-395.
- 7) アウグスティヌス『神の国』(三) 12巻1章, 14巻4章 及び アウグスティヌス『自由意思論』今泉三良, 井沢彌男訳, 創造社, 1969), pp. 67-69.
- 8) Plato, *Euthyphro*, with an English Translation by Harold North Fowler, Vol. I of *Plato* in 12vols., Loeb Classical Library (Harvard Univ. Press, 1914; rpt. 1982), p. 45.
- 9) Plato, *Euthyphro*, p. 47.
- 10) cf. アウグスティヌス『神の国』(三) 12巻7-8章.; Lewis, *Mere Christianity*, pp. 45-46.
- 11) St. Anselm, *Proslogion*, With English tr. and introd. by M. J. Charlesworth (Oxford Univ. Press, 1965; Notre Dame, 1979), Chapter II. pp. 116-117.
- 12) 神の全知は神が悪を予想して, それを助長しているということにはならない。神が知っていることと, それが神の意思であるということとは必ずしも等しくはない。
「神にとってはすべての日が《現在》なのです。神は人が昨日したことを覚えているわけではありません。ただ見ていらっしゃるのです。なぜなら, 人間は前日を失ってしまっていますが, 神は失っていないからです。また, 神は人が次の日に行なうことを《予見》するのでもありません。ただ見ていらっしゃるのです。なぜなら, 明日は人間にとってはまだ来ぬものながら, 神にとってはもう現存するものだからです」。(Lewis, *Mere Christianity*, p. 145) (この概念にはアウグスティヌスの影響が見られる。cf. アウグスティヌス『神の国』(三) 11巻21章, pp. 55-56)
- 13) John Mackie, "Evil and Ominipotence," in *The Philosophy of Religion*, ed. Basil Michell (Oxford Univ. Press, 1971), pp. 100-101. Quot., in Plantinga, p. 33.
- 14) John Hick, "An Irenaean Theodicy," Stephen Davis ed. *Encountering Evil: Live options in theodicy* (Edinburgh: T & T Clark, 1981), p. 44.
- 15) John K. Roth, "A theodicy of Protest," Davis, ed., *Encountering Evil*, p. 12.
- 16) Hick, "An Irenaean Theodicy," p. 41.
- 17) ヨハネによる福音書には, 隣の十字架の罪人との会話については何も書かれておらず, マルコによる福音書には「一緒に十字架につけられた者たちも, イエスをののしった」(15: 32) とあり, マタイによる福音書にも同様に, 「一緒に十字架につけられた強盗たちも, 同じようにイエスをののしった」(27: 44) とある。
- 18) D. E. Glover, *The Art of Enchantment*, p. 130.
- 19) アウグスティヌス『神の国』(三) 14巻13章, pp. 317-318.
- 20) Leanne Payne, *Real Presence* (Cornerstone Books, 1979), p. 64.
- 21) John Milton, *Paradise Lost*, Ed. Scott Elledge (Norton, 1975) V, l. 877.
- 22) Gottfried Wilhelm Leibniz, *Theodicy*, in *Philosophical Works*, Trans, G. M. Duncan. New Haven, 1890, abridged e-text by Carl Mickelsen²²
- 23) Arthur O. Lovejoy, "Milton and the Paradox of the Fortunate Fall," *E.L.H.*, 4. (1937), pp. 162-163.
- 24) St. Augustine, *MPL* 40. 276 quoted in Lovejoy, p. 174.
- 25) Lovejoy, p. 174
- 26) Lovejoy, pp. 171-172
- 27) Scott Elledge, "Background Notes on Certain Important Concepts and Topics in *Paradise Lost*," in *Paradise Lost*, by John Milton, ed. Scott Elledge (Norton, 1975), p. 398)
- 28) アウグスティヌス『神の国』(五) 服部栄次郎, 藤本雄三訳(岩波文庫, 1991), 19巻4章, pp. 27-28.
- 29) アウグスティヌス『神の国』(五) 22巻30章 pp. 490-491.